

海外生活の思い出

本田 正伸（1969年卒）



1. 学生時代

3回生の時に同級生の石井君と初めてインドネシアを訪問。行きは神戸港から仏の貨客船で渡航しました。2週間のバリ滞在やジャワ島のボドブドゥールやバンドン周辺を周遊し、空路で帰国。学生時の初めての海外旅行は今も鮮明に記憶に残っています。

2. 就活は語科指定の丸紅の面接を受け、夕刻には合格通知がきました。入社後、船積担当からスタート。当時日本の織物輸出は活況を極めており、月に1日の休み、連日深夜までの残業で、収入は初任給（3万1千円）の倍以上になりました。4年間のハードワーク部署から輸出課の所属となりました。

3. 初めての海外駐在

1976年にジャカルタ支店織維部に赴任。主な仕事は日本産織物の輸出商売でしたが、過当競争とイ政府の自国産業保護政策等で壊滅状態となりました。特殊糸などの原料商売で食いつなぐ状態が続き、大変な6年半でしたが印象深い滞在でした。この間にインドネシア各地を旅行する機会を得ました。また、特に工場が集中するバンدونには250回以上訪問しました。1979年に始めたゴルフは名門のJakarta golf clubに入会し、25年経過と60歳到達で永久会員となり現在に至っています。

4. 二度目のジャカルタ駐在

約3年半の大坂勤務後、合弁会社P.T.Unitex（本社ボゴール）へ役員として赴任し、輸出の拡大に注力しました。お陰で健全な会社になりました。

この滞在中にヨーロッパの各国や国内各地を訪問し、就中特筆すべきは西イリアン訪問です。ワメナは西イリアンの4,000m級の山に囲まれた盆地です。ワメナ空港に降り立つとコテカ（ペニスケース）だけの男性や、腰蓑のみでオッパイ丸出しの女性が普通に歩いていて、まさに石器時代に戻ったようなカルチャーショックを受けました。但し30年前のことで今では様変わりの筈です。

ジャカルタに帰る途中に立ち寄ったビアク島の海岸には上陸用舟艇の残骸が残っていました。仕事の方は最初の1年は苦しましたが、その後は好転し、やればやるほど結果が付いてきた滞在で、思えば長い現役生活の

なかでの黄金時代でした。

5. 中国浙江省紹興市駐在

1995年2月、PT Fujitexの副総經理として出向辞令を受けました。丸紅時代にオーナーのTatang氏と面識があり、白羽の矢がたつようです。紹興酒と魯迅で有名な都市ですが、当時はド田舎で日本人駐在員は全部で15人程度でした。紹興市共産党書記長と知り合いになつた事が、後日何かにつけて大きな助けとなりました。日本政府援助システムを利用し操業を開始し、顧客は主にドイツ（丸紅経由）中近東（Fujitex経由）やスペイン（直売）でした。「掛け売り一切禁止」方針が焦付きゼロですみました。経営は順調でしたが予期せぬ雑多な費用請求が来ました。例えば農村教育事業付加金、水利建設基金、シロアリ予防費、緑化保証金など40以上で、中には避妊リング検査費というびっくりものもありました。建設・生産当初は種々の問題に悩み1997/98年の為替危機にも直面しましたが、多くの人から協力を得て任務を全うする事ができました。

6. 辞令を受けて中国紹興市から再度Unitexへ赴任したもの、8年ぶりの会社は実質倒産状態で驚愕しました。主な原因は為替危機下での莫大な為替差損です。こんな状態になるまで放置したその当時の社長や本社には呆れるばかりでしたが、2003年3月末に丸紅/Unitexを退社しました。

7. 再度の中国紹興紹欽へ

丸紅退社後、適当な職を探していた所、FujitexのTatang社長から話があり、副総經理として働き始めましたが、暫くして中国側も丸紅サイドも手を引きFujitexの単独経営となりました。なんとか続けていましたが、その後、Fujitex自身も円満撤退を考え始めたようです。撤退理由は国内メーカーの乱立、人件費の高騰、国内同業他社とコスト差等があげられます。結局私自身も退職し、2010年9月に帰国しました。

8. 中国国内旅行の思い出

合計10年間にわたる紹興駐在中に機会を捉えては北京、西安、敦煌、九塞溝、海南島他有名な都市をくまなく旅行しました。特に得難い経験した2か所を挙げ



ますと、2006年7月、フランベール大草原を超えて国境の町、満州里に行ったことです。果てしなく広がる大草原、大きなダライ湖、夜空の満天の星は別世界、ロシア風の満州里の街並み、昔の満州国の西端でした。2007年7月の旅ではドンゴル砂漠を横断中に激しい砂嵐に遭遇し、怖かったものの得難い経験です。エチナ近郊では「幻の西夏王国」黒水城のロマンに浸りました。

9. 最後の海外駐在 ベトナム、ホーチミン

丸紅退職後はインドネシアやタイでのんびりしていたところ、突然丸紅から合弁縫製工場の退職社長の代役を頼まれてホーチミンのタントアン輸出工業開発区のユニフォーム生産工場行きです。大過なく約1年余を勤め上げて2012年4月末に帰国したのが最後の「宮使い」となりました。

長いようで短かった26年間の海外生活、その間、約20年間の単身赴任は妻にとっては「亭主元気で留守が良い」状態でしたが、更に2015年から長期ビザを取得しタイのチェンマイに年間9か月程度滞在、ゴルフやタイ国内旅行や近隣諸国への旅行を楽しんでいます。普通であったとは言え、長い間受忍してくれた妻に感謝しています。

我が交遊録 (ワングル編)

小原 一浩 (1963年卒)



傘寿もとくに乗り越えた年齢に達した。振り返れば多くの人々と出会いそして別れた。その中で大学ワングル部に所属していた時の友達に思いを馳せてみた。

交遊は入学後の各部のオリエンテーションの場でワングル部に所属したのが始まりであった。部は一年上の先輩の山下氏と加納氏が中心になり創立したものである。仲間の多くは「来年は北海道を目指す」との謔い文句に釣られて入部した。灘高出身の小川君、畠傍高出の小山君、市岡高出身の浦田君、紫野高(京都)の堀田君その他の部員とも新人練成からその後の長い付き合いが始まった。

それぞれ専攻語は違ったが同じ釜の飯を食った部活動を通じて親しくなり、勉学はそこにワングル生活をエンジョイし無事に卒業・就職した。小川君は住友電工、浦田君は日立製作所、堀田君は沖電気へ。ワングル部員は当時学生間で大流行の「麻雀」をする間がなく全員が下手だった。そのお陰で就職後に会社の健康保険組

合を利用して「中国語研修会」を持つ機会を得た。研究会とは「麻雀」の事である。就職後、数年して海外へ赴任する仲間が増えていった。例外は埼玉銀行の小山君で残念ながら若くして逝去。「とらきち」の浦田君は日立製作所のパリへ赴任中に阪神の吉田監督を仏野球へ招くことに尽力し、吉田監督の「私の履歴書」の中でも交流記録が残されている。長くパリの日本人会会長を務め「旭日中受賞」を受けた。帰国後の祝賀会が大阪で開催された時に「勲章」と「賞状」を見せて貰った。



仲間内で勲章を受けたのは彼だけである。小川君は住友電工で、国内営業で活躍。陸上部にも属しスポーツ万能だった堀田君は、入社後は長く海外赴任し、英国・アフリカ等で活躍した。帰国後に取締役として、又、専攻語の南十字星会東京支部長として活躍。後年は房総に別荘を買い大好きな海釣りを楽しんでいた。現在も多くのワングル部員と「たびびと会」で懇親を深めているが、前述の各位は全て「鬼籍」に入ってしまっている。一方、宇都宮君、坂口君、島貫君、太田中君、前田君、藪中君、瀧口君等々、専攻語学科同窓生は海外勤務を経験した仲間が多かったのは外大卒のお陰であろう。

人生100年時代と言われている現在、実際はなかなか100歳まで健康で生きながらえるのは難しそうである。

ロシアのウクライナ侵攻、ガザへのイスラエルの空爆、トランプの関税ディール等々想定外の出来事を見聞きしながら地球の無事と世界平和祈っている今日この頃である。

我が人生で出会いそして別れた人達との多くの思い出は例え自分が白骨となっても我が記憶として脳裏に永遠に残り続けるように思えてならない。



これからも続くインドネシア勤務、カリマンタンへの赴任にあたって

金井 京一 (1987年卒)



1987年卒の金井と申します。私のこれまでのインドネシアにおける経験と今後についてお話をさせていただきたいと思います。

私は卒業後に最初の会社である自動車メーカーのマツダに就職しました。同社の海外営業本部にて10年間勤務しましたが、最後の3年間はインドネシアの営業担当として1993年から1996年までジャカルタに駐在しました。これが自分にとってのインドネシア勤務の始まりでした。当時は現在の40%程度の自動車市場規模でしたが、政府の提唱する国民車計画を受けて、当社もインドネシア専用車を導入し、拡販に努めました。しかし狙った通りに販売が伸びせず、営業として大変苦労したことを思い出します。

3年間のインドネシア勤務を経て、縁があつて自動車部品メーカーのアイシン高丘に勤務することになりました。本社で3年間勤務の後、同社のインドネシア進出に合わせて2000年から2007年まで2回目のインドネシア勤務を行ないました。トヨタGのサプライヤーである当社は、現地アストラGとの合弁でカラワン工業団地に工場を建設し、主に自動車用の鋳造部品をトヨタさん、ダイハツさん他主要自動車メーカーに供給を行っています。2000年代初頭の自動車市場の拡大による自動車メーカーの増産を受けて、当社も順調に売り上げを伸ばし、現在は当初の4～5倍の規模まで拡張して操業を行っています。実は私はこの現地法人に通算14年間勤務しています。最初の7年間の勤務を終えた後、自身のキャリア後半に入った2018年に3回目のインドネシア勤務の辞令をもらいました。当時のインドネシア法人は急激な生産拡大により管理が追いつかず、一時業績が悪化していたことや労働組合対応などで現地経験者として再度の赴任の打診がありました。コロナ対応などもあり大変な面はありました、何とか乗り切り、現在では当社はアイシン高丘の海外子会社の中でも一目置かれる存在までステータスを上げてきています。私は管理部門であり、生産部隊程の大きな貢献はできていませんが、仕事キャリア38年の約半分、17年をこの国で過ごし、他では得ることがない貴重な経験をさせてもらったインドネシアに今は感謝しかありません。この国は、ここで働いているときは色々と大変なことが多いですが、離れるともう一回戻ってきてみたいと思わせる不思議な魅力があると思っています。

そして昨年2024年に私は無事定年を迎えることになり、本来は日本に帰国の予定でした。ところ昨今のカーボンニュートラルの流れを受けて当社に新しいプロジェクトが生まれました。鉄スクラップを溶かして製品を作る鋳造業界において昨今のCO2削減は大きな課題でした。アイシン高丘でも石炭由来の燃料から植物由来の燃料に切り替えてCO2削減することを研究しており、そこで候補に挙がったのが、インドネシアが世界最大の生産国であるアブラヤシの核であるPKSでした。この材料を使った実証実験で100%代替が可能という結果を受けて、すでにプレス発表していますが、CPOメーカーであるトリプトラ社と合弁でカリマンタンのポンティアナックに工場を建設することが決まりました。私もプロジェクトの一員として今年6月から現地に赴任します。自分にとって本当にタイムリーでまた不思議な縁ですが、更にインドネシアで仕事を続けることになりました。これまで一度も足を踏み入れたことがなかったカリマンタンを今は何度も訪問して準備を進めています。これからどんな生活になるのか未知数ですが、この年になんでも新しい挑戦の機会を頂いたことに感謝して、精一杯取り組んでいきたいと考えています。



インドネシア駐在中です

増田 崇行 (2007年卒)

会員の皆様、2007年卒業の増田崇行でございます。在籍時の知り合いの皆様、幹事の皆様、お元気でいらっしゃいますでしょうか？

会報寄稿は3回目（？記憶が曖昧）、前回は学生時代のジョグジャ留学話か旅行の話を書いたかだと思いますので、今回は仕事の話を書きたいと思います。

私は、外大卒業後、専門商社の岩谷産業株式会社に就職しました。カセットコンロやオレンジ色のカセットボンベでご存じの方も多いかと存じます。主要事業は、液化石油ガス(LPガス)事業、産業ガス事業、マテリアル事業で、近年は水素事業に注力しています。ガスの調達って格好よさそう、というのが入社動機でしたが、入社後、経理財務・海外管理の業務をしています。

入社4年は近畿支社、東京での1年を挟み、最初の海外赴任はシンガポールで、LPガス調達や商取引、人事採用を担当し、徐々に自信がついてきました。帰国後は経理部で連結決算担当として、グループ会社の業容理解、監査法人折衝、有価証券報告書開示等を行い、会社の業態への理解が進みました。東京勤務時に会計士予備校で習った知識が役立ちました。（資格取得は断念しました）

2018年から2回目の海外赴任先がタイでした。タイ、ベトナム、インドが管轄範囲で毎月出張していましたが、その時にコロナが発生、従業員やその家族の安全を確保しながら会社運営に日々格闘しました。失敗も多かったです。スタッフ第1を考心がけたことが貴重な財産になっています。22年に帰国し、グループの「基幹システム統一プロジェクト」の会計部門を担当していたところ、突然インドネシアへの異動が決まりました。

2024年4月、PT.Iwatani Industiral Gas Indonesiaに赴任しました。社名に' Industrial Gas' とあるように、メインは、産業ガスの製造販売会社で、従業員は170名程度です。ジャカルタには、PT.Iwatani Indonesiaという商社もあり、カセットコンロはこの会社経由でインドネシア各地のスーパー やお店に卸しています。

自動車やバイク、家電といった製造工場では、切断や溶接の際に酸素や炭酸等のガスを使用します。身近では、エアコンの冷媒にはフロン、病院のMRIにはヘリウム、食品添加に窒素が使用されています。当社ではそういう産業ガスを取り扱っています。ジャカルタ周辺には工業団地が多くあり、当社は、カラワンにあるKIIIC工業団地（ジャカルタから東56km、約170社入居）にあります。

現在、日系、非日系合わせて800社前後のお客様にガス供給をさせていただいている。工場内にはガス製造プラントがあり、液化酸素、液化窒素、液化アルゴンを製造しています。これは空気（酸素21%、窒素79%、アルゴン0.9%）が原料です。大気を圧縮し、-200°C近くまで冷却し液体空気になります。液体空気を断熱された精留塔内で蒸発させ、各ガスの沸点の違いにより精製します。製造したそれぞれのガスを、タンクローリーやシリンダー（瓶）に充填し、お客様工場まで配送します。お客様の工場内にあるタンクに充填し配管を通し、ガスを供給します。自社で製造していないガスは、他社からの購入や海外輸入で調達しています。

私の仕事は、財務面では有利子負債削減です。お客様工場にタンク等ガス供給設備を自社資産として設置、ガス販売で投資回収する形態が多く、どうしても借入が発生します。他に税務は複雑ですし、長期に及ぶ税務調査対応、製造原価通減や配送コスト最適化も模索中です。人材面では日本人駐在員からインドネシア人スタッフへ権限移譲するための土台作り、労働組合対応、ITインフラ強化等々です。

赴任し1年経ちますが、インドネシア語しか話さない日もあり、勉強していくよかったですと感じています。先生方に感謝です。毎日色々なことが発生しますが、大変幸せに生活しています。



ジャカルタ人の日常的な スポーツ活動

北村 彰範（伊語 1996 年卒）

私はイタリア語学科出身ですが、仕事上縁がありインドネシアには99年1月から2回駐在し滞在期間は合計10年7か月になりました。最近は暇があるとランニングに精を出しているので、ジャカルタでの日常的なスポーツ活動についてご紹介いたします。

2回目の赴任後は特に運動はしていなかったのですが、何か新しいことを始めたかったので、たまたま見かけた20年3月開催予定の5kmのランニング大会にエントリーしました。



ランニングクラブの練習会に参加する筆者

振り返ると、その頃からランニングイベントが増え始めていたように思います。大会はコロナ禍の為に当初予定から22年11月まで大幅に延期されたのですが、無事に開催され完走できました。

私自身コロナに2回罹患したことから日頃からの体力維持の重要性を認識していて、また年々増加していた体重をどうにかしたいとの思いもあってランニングを続けることにしました。初めて大会に参加して以来約2年間でハーフマラソン4回を含む13回の大会に参加しました。

日頃の練習は辛いのですが、Senayan 地区に引っ越したことで、Jl Jend. Sudirman での Car Free Day や平日もランナーが多く集まるGBKへのアクセスがしやすくなつたこと、また、SNSで見つけた日本ブランドのランニングクラブへ参加したこと等が継続できている要因だと思っています。

私が参加しているクラブには合計450名もの登録者がおり、ランニングや筋トレの練習会には150名程が参加しています。外国人は2名のインド人と私だけで、その他は全てインドネシア人です。目分量ですが、男女比は6対4と意外に女性が多く、プリズミが60%位です。練習会には皆さん参加経験のある大会のTシャツや好みのブランドシャツ、シューズなどをビシッと揃えて参加されています。日頃の体力づくりだけでなく、マラソンやハーフマラソン大会（インドネシア国内だけでなく豪州、日本、欧州にまで遠征される方もいます）への参加のためのトレーニング、或いはSNSに写真・動画を投稿するため等、モチベーション



夜間のGBKの様子



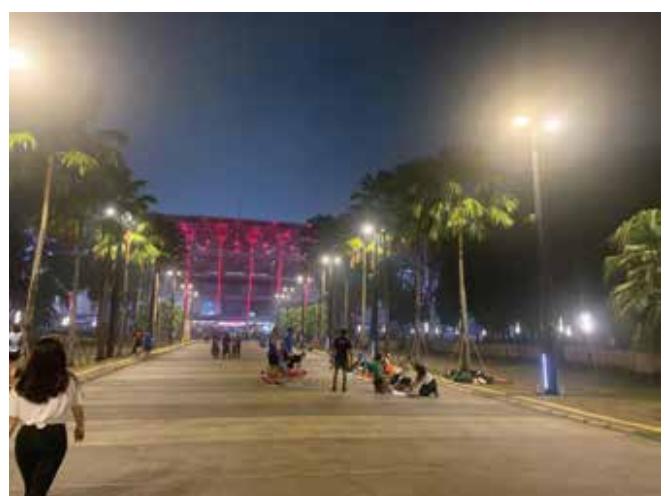
夜のGBKを走る筆者

はさまざまのようです。Car Fee Dayの練習会では沿道に陣取ったカメラマンへのポーズ（アプリで気に入った写真を注文できます）や練習後の記念撮影はとても盛り上がります。クラブは参加者に練習風景や練習後の記念撮影をSNSに載せることを勧めていて、それによる宣伝効果を期待してスポーツブランドがクラブを運営していると思われる所以、参加者と運営者がお互いにWin-Winの関係になっています。

ジャカルタで日常的にみられるスポーツ活動にはランニング（ジャカルタでは年2回のマラソン大会、5~10kmの大会はほぼ毎週どこかで行われている）以外にCar Free Dayのサイクリング、ローラースケート、GBKで行われているバドミントン、筋トレ、ボクサークササイズやフィットネス等があります。皆さんやはりSNS映えを気にされながら思い思いのスポーツを楽しんでおられるようです。

GBKは日が暮れるとスタジアムが電飾でライトアップされ、夜遅くまで人々の姿が絶えません。

健康への意識の高まりやSNS映えをきっかけにインドネシアでもスポーツを始める方々を政府（健康な人を増やして健康保険で貢献する治療費の抑制）や企業（ブランド価値を高める）のサポートによって日常的なスポーツ活動のブームが支えられているものと思われます。私自身はあまりSNSに投稿はしていませんが、仕事上で接するインドネシア人とはまた違った方々との交流を楽しんでいます。



GBKでトレーニングする人たち

2025年 敬虔なイスラム教巡礼

南十字星会事務局

今年も6月4日から一ヶ月間、敬虔なイスラム教徒の一生に一度の、時にはC45度を超える厳しい巡礼が行われました。

榎谷昌博氏(1956年卒)が当会groupmailに投稿紹介されたアンタラ通信・BBC掲載のイスラム教最大の「Ibadah Haji(巡礼のお勤め) 2025 Indonesia」を、大学でインドネシア語を学んだ者にとって、この程度は知つて欲しいとの思いで転載します。

1 Ibadah Haji 2025には、海外はインドネシア(世界1のイスラム教徒国で最大(221,000人))、パキスタン、マレーシア、バングラデシュ、モロッコ、トルコ、等海外から約百万人、サウジ内外計約2百万人が巡礼月に、通年で約5百万人が巡礼します。インドネシアからは、122,156人がジャカルタのスカルノハッタ、ソロシティとスラバヤの3空港からメッカルートで、残りの約10万人は個々のルートでメッカに向かい、1ヶ月間巡礼します。参加者に老人が多いため、今年も190人近い死者が出ました。

敬虔なイスラム教徒は、義務である巡礼と名誉ある「ハッジ」称号を頂くことを夢見て、10年以上のwaitingを我慢しての巡礼です。多少の援助はあるものの費用も一人30~40万円はかかる上に、手続きも煩雑です。サウジ政府と「Haji Foroda(手続簡略化優先巡礼)」枠を取得するための交渉は毎年難航しています。勿論、インドネシア宗教省は万全を期して計画実行支援管理し、連日巡礼の様子を詳細に報道しています。サウジ政府も健康管理・医療を含め最大限の支援をしています。一方で、巡礼後もサウジアラビアに留まる宗教移民を制限し厳しく取り締まっています。

【基礎知識】

イスラム教 5の義務

- ① 信仰告白
- ② 礼拝
- ③ 喜捨
- ④ 断食
- ⑤ 巡礼



【基礎知識】

イスラム教の掟

- ① 豚肉を禁ズ
- ② アルコールを禁ズ
- ③ 礼拝1日5回
- ④ 女性は肌や髪を露出しない



2

2025年ハッジ巡礼の完全なスケジュール

【参考】 P.23 図① 《メッカ大巡礼「ハッジ」》=afpb.com

*5月1日:

ハッジ宿舎への入寮 出発前の最終段階として宿舎への入寮を開始。宿舎内では、健康診断、ロジスティックスチェック、最終的なマナーシク(巡礼に関する説明会)への出席など、いくつかの重要なチェックを受ける。

*5月2日～16日:

第一波(メディナ経由)、17日～31日第2波(メッカ直行)出発。巡礼者たちはサウジアラビアに向けて出発。
メディナでアルバインの祈り(預言者のモスクで40回連続の祈り)を行い、周辺の聖地を巡礼。スケジュールは礼拝が秩序正しく規定に従って行えるよう綿密に計画されている。

*6月4日:

アラファへの旅、全巡礼者はメッカからアラファへ出発。この旅は、巡礼の一連のピークの始まりであり、全体の行程の中核となる。

*6月5日:

アラファでのウクーフ(神の前に立ち、祈る)、ハッジ巡礼の最も重要な日であるパダン・アラファでのウクーフが行われる。巡礼者はハッジの必ず遂行しなければならない儀式の一つとして祈りを捧げる。

*6月6日:

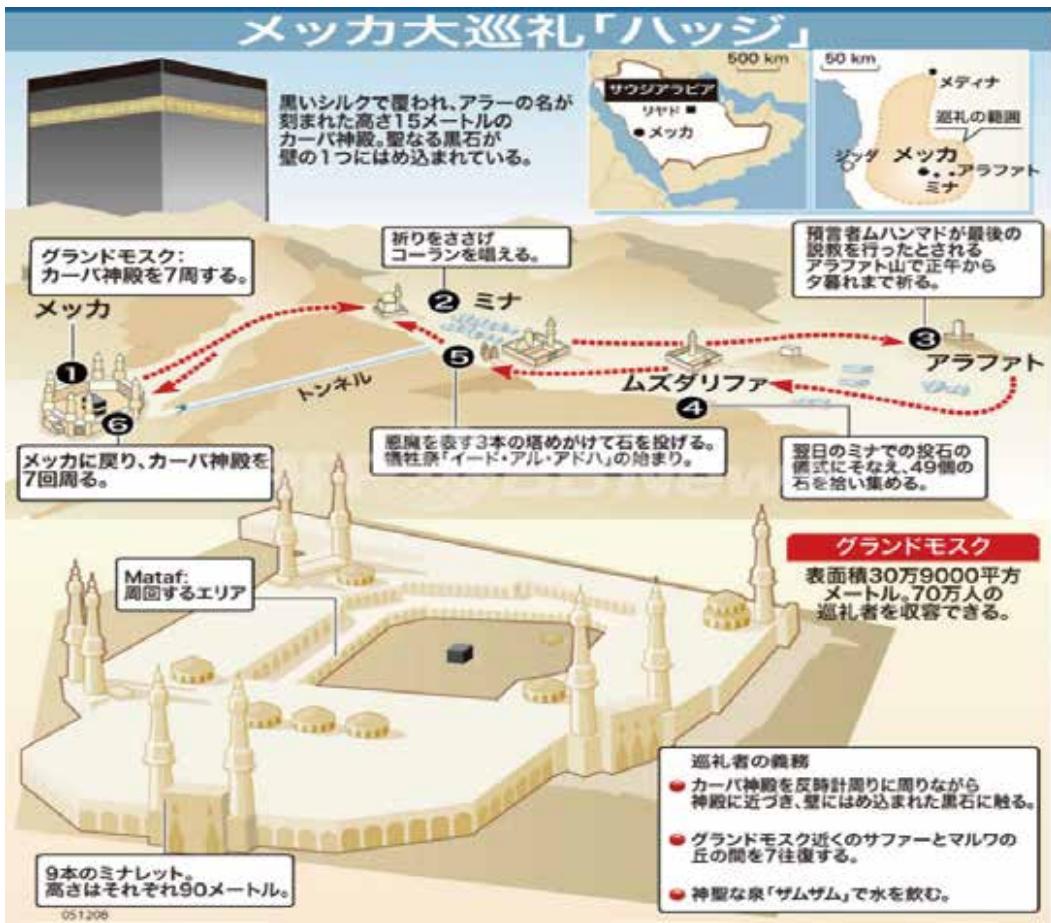
Idul AL Adhaイード・アル・アドハー(1446年より、Idul Fitri(断食明け大祭2025年は3月31日)と並ぶ犠牲大祭)、この日、世界中のイスラム教徒が犠牲祭を祝う。聖地では信者たちがイードの祈りを捧げ、シャリーア(イスラム法)に基づき犠牲の動物を屠ります。

*6月7日～9日:

タシュリクの日 イード・アル・アドハーの3日間はタシュリクの日と呼ばれ信者たちはミナで石を投げる行列を行う。

*7日:

第一回タシュリクの日、8日:第二回、ミナを早めに出発したい巡礼者向け、9日:第三回、最終日まで滞在する巡礼者向け。



図① メッカ大巡礼「ハッジ」

*6月11日～25日：

第一波、26日～7月10日第2波、一連の儀式を終えた後巡礼者は段階的に故郷へ帰還を開始、インドネシアへ帰還する。帰還の手順全体は巡礼者が秩序正しく、快適に進めるよう設計されている。(記者:Sアンギアテダ・シトルス)

3 ハッジ巡礼について知っておくべき5つの事項

Haji巡礼はイスラム教の五行の一つで、身体的にも経済的にも可能なすべてのイスラム教徒は、生涯に少なくとも一度はハッジを行うことが義務付けられています。ハッジが行われるメッカは、イスラム教の非常に特別な位置を占めています。預言者ムハンマドの生誕地であり、彼がアッラーから最初の啓示を受けた場所だからです。この都市にはグランドモスク(聖モスク、メッカの大モスクとも呼ばれる)の中心に位置する黒い布で覆われた立方体のカアバ神殿がありイスラム教で最も神聖な場所とされています。

① 預言者アブラハムから受け継がれたカアバ神殿

この礼拝はイスラム教の創始者である預言者ムハンマドにのみ関連しているのではなく実際には預言者イブラヒムの時代にまで遡ります。イスラム教では、イブラヒムがカアバ神殿の建設に尽力した人物だと信じられています。ハッジの儀式は、預言

者イブラヒムがアッラーへの服従の証として息子を犠牲にしようとした出来事、つまり神の介入によって終結した献身的な行為を記念するものです。預言者イブラヒムはキリスト教とユダヤ教でアブラハムとして知られていて、両宗教の中心人物でもあります。



② 男女分離なし

他のイスラム教の宗教慣習では多くのモスクで異なる入口や礼拝エリアが設けられるなど、男女の分離がしばしば行われていますが、タワーフ(巡礼)期間中は男女の分離はありません。



③ 独自の服装規定

ハッジの巡礼者は精神的な平等と謙虚さを反映した特定の服装規定に従います。

男性のイフラーム服は縫い目のない2枚の白い布で社会的・経済的地位に関わらず、すべての信者の平等を象徴しています。

一方、女性巡礼者は同じ白い服を着ることではなく、身体全体を覆うゆつたりとした控えめな服装であれば着用できます。頭はスカーフで覆わなければなりませんが、ハッジ巡礼中は顔を覆ってはいけません。

④ 丘を登る

ハッジの最も象徴的な儀式の一つはタワーフです。巡礼の初めと終わりにカアバ神殿を反時計回りに7周しますが、もう一つの重要な儀式に二つの丘の間を歩くことも含まれています。グ

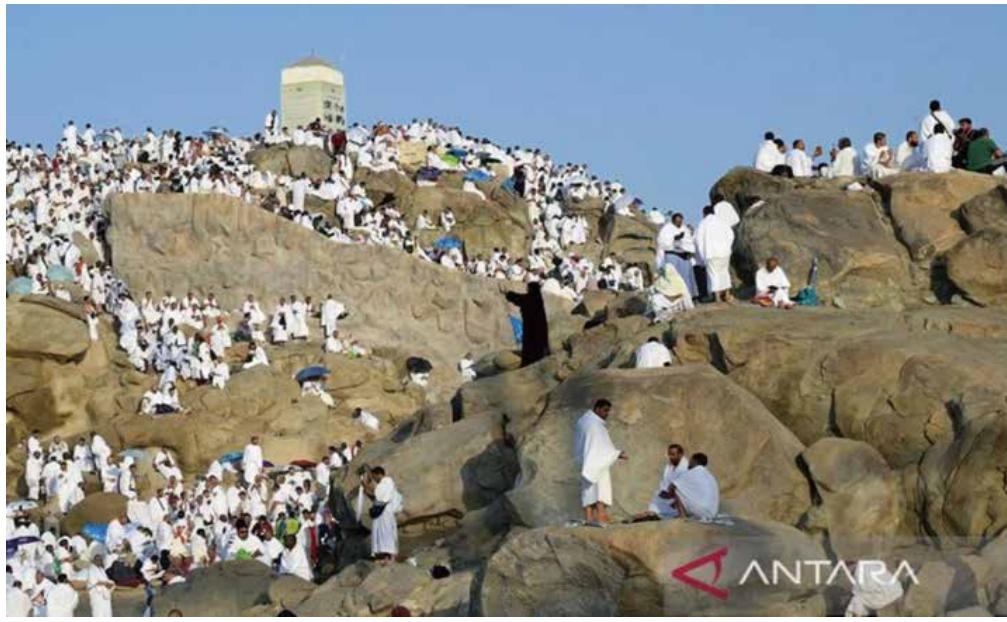
ランドモスク内にあるサファの丘とマルワの丘を7回訪れ、早足で歩くという儀式です。この儀式は、預言者アブラハムの妻ハジヤルの苦闘と忍耐を記念するものです。彼女は幼い息子のために水を求めて、二つの丘の間に必死に走りました。(参考:写真①)

⑤ ハッジのハイライト：アラファに立つ

カアバ神殿はハッジの中心地ですが、その精神的なクライマックスはメッカ郊外にある砂漠の平原、アラファ平原で迎えられます。(参考:写真②)

(BBC Juni 4 2025)

(出所: アンタラ新聞・BBC「Ibadah(お勤め) Haji 2025 Indonesia」)



写真① アラファで、木曜日（2025年6月5日、ワクーフを前にジャバル・ラフマに集まったイスラム教徒たち。



写真② パダン・アラファに集まった信者は厳粛な礼拝と祈りに満ちた一日を過ごしました。

この場所では、日の出から日没まで大勢の信者が集まり、熱心な祈り、反省、内反省そしてコーランの朗誦に満ちた一日を過ごします。この聖地はイスラム教において非常に深い意味を持っていてイスラム教の教えによれば、預言者ムハンマドが最後の説教を行った場所です。

